

---

# 転生して異世界廻り～FAIRY TAIL編

黎白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生して異世界廻り～FAIRY TAIL編

### 【Zコード】

Z2247BA

### 【作者名】

黎白

### 【あらすじ】

転生して異世界廻りシリーズの第二作目。D·C·?の世界の後に、フェアリー・テイルの世界へ行つた蒼影の話。

原作崩壊やハーレム、チートあります。

更新は不定期になります。

## プロローグ（前書き）

楽しんでもらえたら嬉しいです。感想やメッセージ待っています。

## プロローグ

「ここは……。こんな空間一度しか見た事ないし、一度みたら忘れられないって。

俺が転生する時に来た場所だ。という事は……。ああ、そうだ。俺は死んだんだつたな。しかも事故で即死。力でも使えれば良かつたのに、そんな事考える前に体が動いてしまった。

今回は特典の意味なく一人かなあ。俺が死んだのは30歳くらいだし、みんなまだ綺麗でモテてたからなあ。他に好きな人くらい出来るだろうしな。

俺は結局一人を選ぶなんて出来なかつた。みんなはそれを認めてくれたし、初めは社会的には駄目だつたが、途中から一夫多妻になつたんだよな。

そいえば、みんな幸せだつたのかな？まあ済んだ事だし、次の世界に行くとするか。

そいえばまた転生だけど、夕紀のやつ呼べば出でくるか？

すう――

「おーい！夕紀いー！」

ドカッ

「叫ばなくとも分かるわ！」

「痛い……。殴らなくてもいいだろ？」「

いきなり現れた夕紀に頭を思いつきり殴られてしまった。夕紀は女だけど、神様か訳でハンパなく痛かつた。

「まあいいけどさ。で、早速次の世界に行きたいんだけど、ビーチたら良いんだ？」

「まあ、少し待て。人を待たないといけないからな。」「

こんな所に来れるのなんで、神様くらいじゃないのか？それか、俺と同じ転生者か。

「人つて誰なんだ？」「

「

「後での楽しみだ。別にお前にとつて悪い事ではないから、安心していいぞ。」「

「ならいいけどさ。」「

俺にとつて悪い事じゃないって事は、やっぱり別の神様とかか？

他の転生者は悪い事ではないけど、時には悪い事にならうだし。

まあ、後で分かるんだしいいか。

なら、次に行く世界でも考えておくか。ゴッドマイターもいいし、スタードライバーともいいかもしねないな。フェアリー・テイルも

悪くないな。

D・C・?の世界では基本平和だから、力を使う事なんか滅多になかつたしな。

まあ平和が一番なんだけど、折角ならちゃんと使ってやりたいしな。  
いろいろ作ったのはいいけど、結局使えなかつたりしたからな。まあ転生の時に貰つたやつを別荘代わりにして、息抜きとかと一緒に試したりはしたけどな。

「ん、やつと来たみたいだぞ。」

「やつと来たのか？結構遅かつたな。」

「こりこりやる事があつたんだろう。お前の後ろにこりこりや。」

なんで待たされたのかや、誰に待たされたのかも知りたいし、夕紀に言われて後ろを向くと、そこにはD・C・?の世界でこんな俺を愛してくれて、俺が愛した人達が全員いた。

一つ違うのは、最後に見た大人の姿ではなく、学園生活を楽しんでいた時の姿だつた。

「びひじひじに……。浮かぶのはただそれだけだった。

「びひじひじて、お前が望んだ事だらうが。もう�れたのか。」

「でも、あれは……。」

あれは最終的に愛し合っていたらであった。もしさうなら、俺が死んだ後も……。

「そうだったの。全員がお前が死んだ後も想い続けたんだよ。正直驚いたぞ。」

「どうして……。」

「そんな事決まってるよ、蒼影君。ボク達は、蒼影君以外愛したりしないよ。」

みんなを代表してか、さくらがそう囁く。その言葉にみんなが頷いている。

嬉しい……。ただそれだけだ。

みんなには俺を忘れて、幸せになつてもらいたいと思つたけど、心のどこかど一緒に居たい。他の人に渡したくない。そう思つていた。醜い独占欲だけだ。

「さて、説明は全員聞いてるだろ？ どうすの？ このまま記憶を無くし転生、まあ普通の状態だな、それか蒼影と一緒に生きて行くか。」

「そんなの決まってるさー。ナツミ達は、リュウウチと一緒に生きるぞー。」

「だが、いいのか？ 中には、人を殺さなければいけない世界もある。」

「

そうだ……。俺は途中夕紀に呼ばれ覚悟を決めた。でもみんなはそうじゃない。普通に暮らしていたんだ。人を殺すなんて出来るはずがない。

一度別荘を使い、みんなを試した事があった。その時はみんな吐いていた。その時人を殺す俺の姿を見ても、俺の事は嫌いになつてなかつたが、殺すなんて別問題だ。

「そんな覚悟してゐるわよ。あたし達は蒼影と生きるんだから。」

まゆき先輩……。

「…………、その覚悟本物みたいだな。心から覚悟しているし、それ  
なりい。」

「少し待ってくれ。」

ついて来てくれるのは、嬉しいけど。

「それでいいのか？ 実際、別の世界ではあまり全員で過ぐしたり出来ないぞ。そりや別荘あるし時間は短いけどさ。」

そう、一度に過ぎるのは二、三人。多くても、六人だ。

「別にいいですよ。蒼影なら、平等にしてくれるつすから。」

「そうですよ。影兄はなんだかんだで時間取つてくれますから。」

「そりや、出来ぬ限りはするや。」

「なら、ボク達は大丈夫だよ、蒼影。」

はは、恥ずかしいけど泣きそうだ。いろいろと力を作った中に、嘘に敏感になるのとがあるから、本当に愛されてるのが分かる。

「さて、話はまとまつたみたいだな。」

「ああ、悪いな。」

「別にいいさ。ああ、次の世界だが悪いが決まつてるから。」

「どうしてだ?」

「イレギュラーだよ。フュアリーテイルの世界に行つてもうひ。」

「みんなは大丈夫なのか?」

みんなは魔法なんて知らないだろうし、力もない。俺があげれるんだろうけど。

「大丈夫だ。知識は与えるし、ちゃんと力も与えるからな。足りなかつたら、蒼影が与えたらいい。」

「わかつた。」

「そつそつ、藍、まひる、美夏、美秋に關しては人間の体を与えてるからな。」

「そこまでしてくれたのか。ありがとう。」

「これでまひるに藍、美夏に美秋は人間と同じか。よかつたな。

「気にするな。後は……、誰を連れて行く？」

「誰をかか……。一、三人くらいがいいか。なら……学園生活でイタズラとかでも罷とか凄かつたし、鈴花とそれを回避してたまゆき先輩か。後は、ナッシミかな？」

「そうだな。ナッシミ、鈴花、まゆき先輩、お願ひしていいか？」

「おひ、あたし? もちろん、いいよ。」

「わかったのやー。」

「了解つす。」

「まあ、たまには変わつて貰うけどな。」

「なら送るぞ。力は、知識として入るから。後は、離れても念話みたいのが出来るアイテムつけてやるよ。」

「ありがとうな、夕紀。みんなも本当にありがとうな。」

みんな笑っていた。フェアリーテイルの世界でも、幸せに出来ればいいな。

## 訓練（前書き）

やつやを発売しているの全部買って読みました。少し聞きたい事あるので、後書きみてください。

周りを見渡すと、一面木だけしかなかった。森の中……か?うーん、まあ夕紀がくれた魔法を使いこなすためには丁度良いな。周りには居ないし、怪我させなくてすむな。

他にこれからどうするか考えないとな。さてと、まずはもらつた魔法の確認だな。俺がもらつたのは……霸天竜の滅竜魔法？

霸天竜つてのは神界の竜みたいだな。てか、滅竜魔法つてそれだけでチートっぽいのに神界の竜つてなんだよ。

「ん……、」「は?」

「まゆき先輩、起きたのか?」

先輩やさん付けは一緒に暮らしてたけど、結局取れなかつたんだよな。呼び方は学園の呼び方か下の名前になつただけだしな。みんな納得はしてるみたいだけど。

「蒼影?」

「ああ、ちなみにここは転生先の森みたいだ。」

「なんでそんな所に?」

「さあ?ただ夕紀にもらった魔法を使いこなすためには丁度いいと思つけどな。」

「確かにそうね。なら、ナツミと鈴花を起しちゃないと。話しあっても出来ないわよ。」

「なら、ナツミを頼む。俺は鈴花を起しちゃおくから。」

「わかったわ。」

まゆき先輩居て助かつたな。まゆき先輩は結構しつかりしてたし。

その分デレた時はギャップでヤバいんだよな。

「おい鈴花、起きる。」

「ふあ…………、一体なんっすか？」

「わっしき話してただろうが。転生して着いたんだよ。」

「ヒロがフュアリーテイルの世界っすか。」

「確かに、魔法がある世界だつたわね。」

「やうなのさ。後、名前もナツミみたいに外国と同じなのさ。」

後ろにナツミとまゆき先輩がいた。起しきしてくれたみたいだな。そいえば、D・C・?にはフュアリーテイル無かつたような。何で三人しつてるんだ？魔法ならまだ分かるが、名前なんて分からぬうじ。

「なあ、何でこの世界について知ってるんだ？」

「あの神様のおかげですよ。」

「とこりよつ、自分が話してたじやない忘れたの？」

「あー。確かにそんな事行つてたな。」

確かに魔法と知識つて言つてたな。知識つて魔法の方と思つてたよ。

「じゃあまづは名前つすね。名前はどつするつすか？」

名前か……。ナツミは良いとして、俺達はこの世界ではおかしいからな。ただ名前逆にしたりすると、違和感あつたり面倒だしな。

「別にそのままでいいんじゃないの？」どうせ変えたつて違和感があるじ。」

「わづひすね。ただ名字は前の名字に戻した方がいいつすね。」

一応結婚したから、名字は全員波柳になつてる。まあ、新しい法律では名字は一つの内どちらでも良かつたんだけど、みんな波柳を名乗つていた。

「わづひだな。全員が同じ名字つのはな。」

「あたし達はどつせ名前呼びますけどね。それより、これからどうするつすか？」

「やつぱりあの神様がくれた魔法を使つてなせるよつしなこと。」「それより向でこなに小れこのやつ。」

今の俺達はナッシーの言う通り、体が小さくなっている。後、三人は話しか方とか体に引っ張られてるみたいだ。

「さあ？原作とかに介入する為じゃないのか。」

「それなら大きくなるまでには、魔法も使いこなせるでしょうしね。

「

「なるほどなのさー。」

「そうだ、これ渡しておくれよ。夕紀が通信ようだつてよ。他のメンバーにも送られてるから。」

「これって……。あの時計つすか？」

「それって昔に蒼影がくれた時計？」

夕紀が連絡用に渡した物は、よく見たら俺がみんなに渡した時計だつた。

「確かにそうだな。よく分かつたな。」

「あたし達みんなわかるわよ。蒼影が作つたつて聞いた時驚いたしぶつと使つてたからね。」

「大ににしてたんだから忘れるわけ無いのさ。」

「そこまで大にしてくれてありがたいな。」

「ありがとな……。そうだ、その時計は転生する時も無くならない

らしいから。

「良かつたのぞ。」

「そうつす。他のメンバーでギルド作らないつすか?」

そんな事を話してたら、急に鈴花が言い出した。

「ギルドを? 何でだ?」

正直ギルドを作る意味がないと思うんだが。

「ギルドを作れば、他のメンバーに作つてもらつたら、お金も貯まつすし身分もあるから、こやという時に助けれんつすから。」

「それもそうね。音姫にマスターを任せたらいいかもね。生徒会でよくまとめてたし、杏もいる事だしね。」

「そういう事です。まあ、今は船頭とかぐらいで五歳になりましたが、経たないといけないっすけど。」

それはいいだろうけど、ギルド作つたり、マスターとかつて大丈夫何だろうか？まあ、また別世界つて事でなんとかなるのか？

そうだな……。そうなるとちよくちよく会いに行くか。

「なら、そうするか。」

別荘組は年齢とかは学園の時みたいだし、原作少し前にまた連絡して作つてもらつたらいいか。

「なら、連絡するから。少し待つで。」

「了解。」

やつぱり頼りになるな。一人だつたら、ギルドに入る事しか考えなかつたしな。

「蒼影、音姫達もこいつで言つたわよ。」

「早いんだな。ギルド名とかは決まつたのか?」

「ええ、向こうも似たような事を考えてたみたいよ。だから、ギルド名考えてたらしいわ。」

「やつなんだ。何て名前なんだ?」

「蒼龍の影《ブルーシャード》らしいわ。ソウエイの名前からみた  
い。」

蒼龍の影《ブルーシャード》正直単純だな。しかも龍がいいに行つた  
んだ?

「それでいいんじゃないですか?」

「いいこと思ひのやー。」

「みんながいいなら俺はいいけど。」

「ギルド自体は魔法使こなせるようになら、作るみたいよ。」

「なら、次はあたし達の魔法確認しないつすか？お互に知つてた方がいいつすよ。」

「それもやうだな。」

「なら、ナツミからなのさー。ナツミは『写真実現《スクープ》』なのさー！」

……うん、名前からしてナツミに丁度いいな。内容はわからぬけれど。

「どんな魔法なの？」

「簡単なのさ。ナツミが撮つた写真を一定の時間実現させるのさ。ただ、写真は一回使うとなくなるし、撮つて時間が経つと意味ないみたいなのさ。」

チートだな。でもこの世界でカメラつてあつたか？

「ちなみに、カメラは何故あるつすよ。はい、ナツミ。確かに渡しあつすよ。」

「サンキューなのさー。」

「チートだな。えつとじやあまゆき先輩は？」

「あたしは普通みたいね、風の魔法よ。風帝の領域つて名前みたいね。」

「そりなー。ただ消費魔力はほとんどゼロで範囲も広いみたい。後は、範囲内の風魔法吸収みたい。」普通か？

「次はあたしつすね。」

多分チート何だろな。まゆき先輩の消費魔力ほとんどゼロで風魔法吸収つて結構卑怯だな。

「わうなのぞ、鈴花の魔法はなんなのさ？」

「あたしは、罠製作《トラップマスター》つす。」

「ああ、鈴花はなんとなく分かるかも。D・C・?でも対生徒会にいろいろ作つてもうひつたしな。」

「これは罠をすぐに作れるみたいつす。使い方では遠近びりりでも使えるつすし、敵の感知にも使えるつす。」

「みんな使い方次第では使える物ばかりね。で、あれだけチートとか騒いでた蒼影はなんなの？」

「どうせ蒼影の事つすからチートになるつす。」

「ココウツチだしあり得るのさ。」

「俺だからって酷いんじやないか？何も聞いてないのにや。」

「霸天竜の滅竜魔法…………。魔力込められてたら、何でも喰えるらしい……。」

「やつぱりあたし達より蒼影の方がチートじやない。ねえ、鈴花、ナツ!!。」

「アハハハね。」

「つかねこのやー。」

「ううべ、やの通りだナゾ。」

「まあ、ここわ。なり、早速特訓と行へわよ。」

「「「了解(つす)。」」」

まあこいや。この世界は争こもあるし、みんなを守られるよいつら  
なことな。

## 訓練（後書き）

原作で天狼島の話終了後、七年つて……。

聞きたいのは、原作道理にするかです。まあ、そこまで行くのに何年掛かるか分からぬけど……。

正直、主人公の能力あつたら、何とでもなるんですよね。でも、それだと初代マスターとかいろいろ問題出るだろうしな。

天狼島は原作のままか、オリジナルにするかどっちが良いでしょうか？オリジナルなら案とかあつたらお願ひします。

協力お願ひします。

## マカロフとの比較（前編）

今回はかなり原作が変わっていると思います。

## マカロフとの出会い

そろそろまゆき先輩達戻つてくるか？今、まゆき先輩達は魔法の練習に行つてるんだよな。ちなみに、大分使えるようになつていてる。

「ただいま、蒼影。」

「おかえり、メルディ。」

戻ってきたのは、メルディだった。メルディは原作では、悪魔の心臓『グリモアハート』に襲われた町の生き残りで、ウルティアに拾われるんだけど、偶然そこに作った技能を試すために行つたんだよな。

で、原作より敵が減るならといろいろ有つて、俺が保護したんだよな。後は、俺に懐いてくれてるし、多分異性としても好きなんだと思う。これはまゆき先輩達に言つて氣付いたんだけどな。一応メルディには転生やらの事教てるんだけど、それでも良いつて言つてくれるてる。

てか、何度も経験しても受け入れられた時は嬉しいな。

「で、どうだつた？」

「使いこなせるようになったよ。」

「そつか、頑張つたな（ナデナデ）。」

「／／／／／」

使いこなせるようになつたつてのは、原作と同じマギルティ・ソドムとマギルティ・センスを教えたからだ。まあ、マギルティ・センスは少し手を加えて、共有ではなく、自分と同じ痛みを与えるだけだけどな。じゃないと、相手が死ねばメルディも死んでしまうし。

後、技能作成『スキルメイク』で風力加工『エアアート』を作り、技能渡し『スキルファイード』を使ってメルディに渡したな。

流石にあの二つだけだと心配だし。他の原作でメルディが使ってた魔法は知らないしな。

ちなみに、技能渡し『スキルファイード』は作った技能を他人に与える事が出来るので、渡した技能は消えない。

てかファイードって『覚える』って意味が有つたはずだし、いいよな。

「蒼影、戻ったのさ！」

ナツミ達が帰つてきたみたいだな。

「メルディも帰つてきてるみたいね。」

「蒼影は何してたんっすか？」

「俺？ またいろいろ作つてたよ。重力操作に入れ換える魔法とか。後、魔力分解。」

「またつすか？ 全部覚えてるんすか？」

「いや、だから技能目録《スキルブック》作ったんだし。」

思い付いたら作ってるしな。よく使うの以外は覚えてるわけ無い。

「そうだつたつすね。そいえば、誰かこの森に入ってきたみたいっす。」

「侵入者？ 蒼影、排除していくる？」

「いや、大丈夫だよ、メルディ。」

メルディはまだ小さいし、対人は難しいだらうしな。それに、侵入者つて……。別に俺達の森じやないんだし。

「それにこつちに来てるみたいだからな。」

一応探索用の技能を一つ使ってるしな。

「やうなのさ？」

「ああ、多分、そろそろ来ると…………。」

「子どもじゅとー？」

近くの茂みから出てきたのは、小さな老人だつた。まあ、フェアリーテイルのマスター、マカロフなんだけどな。しかし、こんな所で出会えるとは思つてなかつたな。

でも、ちゅうどいいか？ 魔法は俺もメルディやまゆき先輩達も使いこなせるよつになつたし、マカロフだつて子どもだけでいたら保護

しゆつと囁ひだねつ。

「どつこいんな所」……。」

「蒼影、どうするか？」

「保護してもうおつと思つてゐるけど、フュアリーテイルのマスター  
だし、ちゅうどこ。メルディ達もいか？」

「蒼影がいいなら、私はいい。」

「あたしもいこよ。」

ナッシと鈴花も頷いてるし、大丈夫だな。

「お主ら、何をしておるのだ？ 親はどうした？」

「親はない。だから、ここで暮らしてたんだ。せつこう爺さんは  
？」

「ワシか？ ワシはマカロフ。フュアリーテイルとこうギルドのマス  
ターじゃ。今回は依頼が合つて森に来たのじゃが、お主らは？」

依頼か……わざわざマスターが出てくるつて事は、評議員にでも直  
接頼まれたか？ フュアリーテイルは評議員に嫌われてるみたいだし。  
鈴花、ナッシ、まゆき先輩だ。」

「ふむう……。お主ら、ワシと来んか？ ガキだけで生活するのも大

変じやね?。ギルドには同じくこのヤシモコるからね。」

相手から言つてもらえて良かつたな。それにしても、上手く行き過ぎじゃないか?まあ、楽に進むんならいいけど。

「いいのか?もしかしたら敵かもしれないけど。」

「敵はそんな事言わんわい。それに、人を見る目はあるわい。」

「……、なう世話になるよ。よろしくな、マスター。」

「つむ、着いて来い。ギルドに案内するとしようつかの。」

これで原作には介入出来るな。それに漫画やアニメのフュアリー＝イルの空気は好きだつたし、楽しみだな。

後、家買わないとな。幸い、D・C・?の世界で買い溜めた宝石あるし、なんとか買えるだろう。子どもだから駄目なら、マスターに頼めばいいし。

「蒼影……。」

ギルドに行くのが心配なのか、メルディが服を引っ張つてきた。メルディこんなキャラだつたか?

「心配すんなつて、メルディ。別に俺はいるんだしな。(ナデナデ)

「

「……うん。」

可愛いなあ。若千まゆき先輩達の目が痛こよつな気がするナビ……。

「やじえば、マスターは何でここに来たのさ？」

「依頼と言わなかつたかの？」

「内容の事を聞いてるんつですよ。」

それは俺も気になるな。マスターが来るくらいの依頼つてどんな内容だろ？

「評議員から少しな。討伐の依頼じやよ。まつたくギルダーツがあれば……。」

ああ、ギルダーツがいなかつたマスターが来たのか。

「大変みたいね。蒼影も入るから、もつと大変になりそつだけどね。」

「

「まゆき先輩の言つとおつすすね。蒼影抑えるつすよ。」

マスターに聞こえなによつて言つてくる、まゆき先輩と鈴花。失礼なやつだ。」

「こや、あつてると思つたわよ。」

「あれ？」

「声に出でたわよ。」

「マジか。てか、そのとおりって……。」

そんな苦労掛けてるか？

「蒼影は優しいから大丈夫。」

「ありがとな。」

でも、それはフォローになつてないと思つぞ、メルディ。まあ、優しきつてのは結構嬉しいけど。

「お主ら魔法は使えるのか？」

やつぱり聞くよな。あんな森で住んでたんだし。まゆき先輩、ナツミ、鈴花、メルディは答えたみたいだな。まあ、どんな魔法かは教えてないみたいだけど。

俺は教えた方がいいのか？やつぱりフォアリー・テイルにはナツがいるし、滅竜魔法が使えるつてのは言つた方がいいか？

いや、どうせフォアリー・テイルに言つたら喧嘩売られそうだし、お楽しみつて事で内緒にしておくか。そつちの方がなんか面白そうだし。

「俺は一応使えるよ。」

「せひ、やつか。そつじや、今日また元気に泊まるからね。」

「ああ。」

フェアリー テイルにはどれくらいに着くんだろうな。

## マカロフとの会話（後書き）

今回はメルティがグリモアハートに入るの阻止しました。まあ、描[写]はないんですけど。過去話みたいにかくかもしれませんけど。

後、最近あまり書けなくなってきた。少なくとも一話、二三十文字書いてみたいんですけどね。

## フュアリー・テイルへ

森から出て一週間。みづやくフュアリー・テイルに着く事が出来た。まあ、途中少し寄り道が有つたから遅くなつたんだけどな。ちなみに、少し前に俺達は十二歳なつた。メルディがちよつと三日前に誕生日だつたんだよな。

「リジがワシの、ギルド、フュアリー・テイルじや。」

そこには、新しくなる前のフュアリー・テイルがあつた。やつぱり原作の景色見るのは嬉しいな。

「楽しみますね。」

「ああ、やうだな。」

ただ、中から聞こえる喧嘩みたいな声がすんなつて不安なんだが……。

「今帰つたぞ。」

そう言ってギルドに入るかマスターの後を着いていく。中には、原作より若い原作キャラがいた。

「おー、今なんつた、ナツー。」

「なんだやんのか、グレイフー。」

「上等だつーやつてやうじやねえかつー。」

「後悔すんじゃねえぞ、この野郎っ！」

わつかの喧嘩はナツとグレイだったみたいだな。といつが、上半身裸の男とマフラーをしている男つて……。真反対だよな。

「あれ、止めなくていいこのやつへ。」

「気にせんでいいわい。それに、エルザが止めるじゃねえ。」

エルザか……。でも、この時期エルザはいつもよく喧嘩してたし、逆に酷くなるんじゃ……。

「やめないかっ！ナツ、グレイっ！」

マスターの言つたとおり、緋色の髪をした少女……まあ、エルザなんだけど。が止めに入つた。

「なんか少し麻耶に似てない？」

「まゆき先輩も思つた？」

まゆき先輩の言つとおり、一人の喧嘩を止めるのが、三バカを止める麻耶に被つたんだよな。委員長っぽい所とか。まあ、麻耶は実際委員長だつたんだけどな。

「「ああ？」」

「「うなされな、エルザ！なんだ、やんのかつ！」

「なんなら、お前からやるってのか！？」  
やつぱり止まらないよな。原作ならまだしも、まだガキだしな。

「蒼影、大丈夫なの？あれ。」

メルティも自分が入るギルドだからか心配なんだろう。俺に聞いてきた。

「ああ、見てなつて。」

「「「「ホッ……。」」

「本当だ。」

しかし一瞬つてのは凄いな。

「エルザが帰つてきたつて？」の前のつづきだ。かかっておいで。

「

「なんかまた始まつたみたいね。」

「そつすね。あれは多分やるつすよ。」

多分鈴花の言つとむりになるだろつな。しかし、やつぱつ//リヒ性  
格違うよな。

「//ハ、そついえば決着がまだだつたな。」

てか、飛び交つてゐる言葉が女子としてかなり不適切なんだけど…  
…。被害もナツ達より酷いし。

「風力加工《エアアート》、風壁。」

「ひちに飛んでくる物をメルティが防いでくれる。

「ありがとうな。」

「蒼影の為だから。」

ちなみに、鈴花とナッシはまゆき先輩が防いでいる。

「エルザのやつ、あれで俺らに喧嘩するなって言つんだからなあー。」

確かに。グレイの言つとおりだよな。

「くそー、エルザも//ラもいつかぶつたおしてやるつー。」

今ままだと、ナツには無理だろ。

そろそろマスターが止めるみたいだな。

「ええー、やめんかエルザに//ラジーンー。」

「つー。」

マスターの近くにいた人が、マスターの事が大きすぎたのか、耳を押さえている。俺達は、メルティ、まゆき先輩の魔法で風を操つてから平氣だ。

「マスター、おかえりなさい。」

「帰ってきたんですね。」

「仕事お疲れさまです。」

やつぱり人望はあるな。てか、なんで入ってきた時に気が付かないんだよ。

「あれ?マスターその子達だれ?」

俺達に気が付いたリサーナが声をかけてくる。

「おお、わざわざ。このナツの、今日ばかりのギルドに入る子達だ。」

「波柳 蒼影。よろしくな。」

「ナツミ・キヤメロンなー。」

「高坂 まゆきよ。よろしくね。」

「深倉 鈴花っす。」

「メリディ。」

「弱そうなヤツだけビ、お前、強いのか?」

いきなりだな。いつの間にか近付いてきたナツが俺に声をかけてくる。

つて！

「メルティ、抑える抑える。」

メルティが俺を貶されたからか、マルギティ・ソドムを使おうとする。

「でも……。」

「そうじゃな、ならナツ、蒼影戦つてみるがよ。」

「あたし達はいいの？」

「うむ、蒼影が強ければ、お主たちもそれなりではあるじやうつしな。」

「

「よつしゅ、なら、行くぞ！」

マスターに促されて、ナツと他のギルドメンバーが外に出て行く。  
なんかエルザとミラ、ラクサスからの視線が強かつたけど、何でだ  
？まさか、戦いたいとか思つてないだろ？

「わい、準備はこいな？」

「ああつー。」

「いいつよ。」

ギルドから出て、ナツと向き合つ。周囲には他のギルドメンバーがいて、鈴花達はギルドメンバーから少し離れて見ている。

「では、初めー。」

「行ぐぞ、火竜の…咆哮ーー！」

マスターの命図と同時にナツが俺に攻撃を仕掛ける。俺は、その魔法を避けずに当たる。

「なんだよ、やつぱり弱いじゃ ないか。」

「期待して損したな。」

…………わざとだけど、ムカつくな。 というか、なんで俺よりメルティがキレてるんだよ。今は、まゆき先輩が押さえてるみたいだけどな。さて、ちやんとするか。

「なんだよ、じつはやん。弱いじゃないか。」

「あのや、ひやんと敵は最後まで見とかないと。」

倒したと思つて油断して、倒されるとか洒落にならないしな。

「「なーーー。」

ナツだけでなく、観客も驚いている。驚くには早くないか？

「んじや、次はこつちな。霸天竜の氷弾。」

腕に氷を纏い、弾丸として飛ばす。

「なー？火竜の鉄拳！」

それはナツの火で蒸発する。まあ、わざと蒸発しやすくしたんだけど。

「ビードよー？」

見えなくなつたからか、ナツ焦つてるな。まあ、いいや。

「これで終わりな、霸天竜の雷槍。」

水蒸氣で見えなくなつてゐるナツの後ろに周り、雷の槍を打ち出す。

「グアツ！」

ナツはモロにくらい、氣絶する。やつぱりといつうか、観客は皆驚いてるな。

「マスター。」

「あ、ああ。勝者、波柳 蒼影ーー。」

ウワアアアアツ

観客の歓声が聞こえる。それと同時に、エルザ、ミラ、リサーナ、レビィ、グレイ、エルフマンが近付いてくる。

あれ？ レビィって、ギルド加入もつと遅くなかったか？ まあ、早くい  
るならその分仲良くなれるし、別にいいけど。

「蒼影、お主滅竜魔法が使えたのか！？」

「まあね。」

「なんの竜なの？」

「えっと……。」

名前は分かるけど、いきなり名前を叫うのはおかしいしな。

「リサーナだよ。リサーナ・ストラウス。」

「私は、レビィ・マクガーデン。よろしくね。」

「波柳 蒼影だ。よろしくな。で、なんの竜か。霸天竜つてので、  
魔力があれば大体は食えるぞ。」

「「「凄い……。」」

「「「おい、私（俺）と戦え！」」

後ろにいた、ミラ、エルザ、ラクサスにそう言われた。

もしかして連戦ルート？

## バトル

「おい、私が先に戦うんだよ。」

「いや、私が先に戦おう。」

「何言ってんだよ。俺に決まってるだろうが。」

俺の前で、三人が誰が先に俺と戦うかで揉めている。フェアリー＝イルって戦い好き多いよな。

ま、いいか。重力操作も使えばどうにでもなるし。

「あんた、やるよ。」

お、決まったみたいだな。

「あんたが一番？」

「そうじゃ、一番がミラ、一番がエルザで三番がラクサスじゃ。」

「結局三人かよ。まあ、いいや。」

「私はミラジーンだよ。」

そう言つたミラの姿が変わる。なんかカッコいいな。俺も似たの作るつかなー。

「サタンソウル、悪魔の力を身にまとつ魔法よ。」

「初め！」

マスターの合図と同時に重力を操り。ミラの動きを封じる。まあ、動けなくなる程度だから、そこまで重くないだらうけど。

### ミラジーン side

波柳 蒼影。マスターが連れて帰つてきたやつらの中に一人だけいた男。他のやつらを見る限り、リーダーのよつなやつだから強いんだろうと思つたけど、全くそつは思わない。

「弱そうなヤツだけで、お前、強いのか？」

ナツがやつとつたけど、多分他のメンバーもやつ思つてゐるんだと思う。

そいつらは、ナツの発言はあまり気にせずに平然としていた。

「やうじやな、ならナツ、蒼影戦つてみるがよい。」

マスターの提案で、ナツとアイツが戦つ事になつた。周りはナツにすぐやられると思ってるみたいだな。まあ、ナツは私にはかなわないけど、それなりに強いからね。

「火竜の……咆哮……！」

戦いが始まつてすぐにナツの滅竜魔法がアイツに当たる。アイツは全く避ける素振りもなく、ナツの魔法に当たつた。

「なんだよ、やつぱり弱いじゃないか。」

「期待して損したな。」

周りの声が聞こえたけど、私は何故かそつは思わなかつた。

「あのや、わやんと敵は最後まで見とかないと。」

アイツは、ナツの攻撃なんて無かつたかのよつに立つていた。

そして、ナツと同じ滅竜魔法を使いナツを倒していた。

そして、私とエルザ、ラクサスで誰と戦つかを決め、私が先に戦うことになつた。そして、サタンソウルを使い戦おうとしたら、いきなり体が重くなり動けなくなつた。

「重力操作、これで動けないはずだから、降参してくれない?」

アイツは私にそんな事を言つてきたけど、何もせずに降参なんか出来ない。なんとか身体を動かそうとしたが、少し動かせた。

え? 軽い……。

急にそつと今までの重さがなくなつていた。これなら……。

さつきまでミラにかけていた重力だと、動けないはずなんだけどな。

なのに、体を動かしてから重力を戻してみた。

あれで終わるんならそれでよかつたけど、せつかくならすちゃんと戦つてみたいしな。

「仕切り直しか。」

てか、初めから重力操作使わなかつたら良かつたかも。

「はあつ！」

ガンッ

ミラの攻撃が俺の腕にぶつかる。腕に凹を作る？まあ、腕を強化して防ぐ。

てか、音が体から出るわけない音なんだけど。

「霸天竜の雷針、風弾。」

近付いてきたミラの下の地面から岩を打ち出し、風を使い吹き飛ば

す。

流石にあれじや決まらないか。なら、接近戦でいくか？

「考え事なんて余裕ね、手加減でもしてりつもりなのつ！」

「んなわけないつて。霸天竜の翼撃！」

魔力を込めた攻撃で地面に溝が出来る。手加減に関しては、あまり怪我させないようにはしてるから、手加減になるかもしけないけど。まあいいや。さっきの攻撃で作った溝にミラを誘導するか。ミラの攻撃を避けながら誘導するけど、流石にそこまでは注意していないのか、誘導されてるのには気付いてないな。

「つー。」

そして、溝に足を取られて、よろけたミラに攻撃する。

「これで終わりな。」

まあ、女の子の顔には攻撃したくないし、傷つけたくないから寸止めだけど。

「勝者、蒼影！」

「大丈夫か？」

さつき足を取られた時に捻つたのか、ミラが座つたままだったから、声をかけてみる。

「あ、ああ。イタツ。」

やつぱり怪我したみたいだな。直してやりたいけど、治癒魔法つて確かに失われた魔法ロストマジックだしな……。入ってすぐに見せなくないし。メリディにも出来るだけ風力加工《エアーアート》だけにするよ!」言つたしな。

「しょうがないか。少し我慢しろよ。」

「な、なに?。」

「じつとじてるつて。」

足を怪我してこのままをつサーナやエルフマンの所に運ぶ。お姫様抱つこだからか顔が紅くなつてる。

「お姉ちやん!..」

「姉ちやん!..」

「少し見せてくれ。」

「あ、ああ。」

顔を紅くしながら、怪我をした足を見せてくれ。足は少しだけ腫れていた。

これなら氷でも当ててたら良くなるだろ?。

「これで冷やしどいたら大丈夫だと思つから。」

滅竜魔法を使って氷を作り渡す。周りには空氣の膜を作つてゐるから、冷たくなくて直接手で持てる。半分は膜がないから冷たいけど。

「ありがとう……。」

ミラはわざ今までの元氣の良さが無くなつてゐる。顔が紅いから恥ずかしいだけだと思つけど。

「てか、強いのは解るけど、女の子なんだしあんま無茶はしないようにな。後は、あんまり背負い込まないで、人を頼るようにな。」

ミラと戦つていて思つたんだけど、リサーナやエルフマンを守るために強くなろうとしてるのか、肩に力入れすぎに見えたしな。少し違つけど、一人だった時のさくらに少し似てたし。俺の勘違いかもしぬないけど。ミラの頭を撫でながら、そんな事を考えていると、後ろからエルザの声が聞こえたから手を離す。

「あつ。」

ミラの名残惜しそうな声が聞こえるけど、無視する。このまま続けてたら終わらないし。

「やつときたか。」

戻るとエルザが待つてゐた。やつとつて……。そこまで待たしてないと思うんだけど。てか、手合わせまゆき先輩達に任せたら良かつた。

「つとー！」

いつの間にか始まつてたみたいで、エルザが斬りかかつてくれる。

「沈め。」

エルザの攻撃を避けて、剣にかかる重力を操作して地面に埋める。かなり大きな重力かけたし、簡単には抜けないだろ？

「霸天竜の牢獄！」

魔法で作られた様々な属性の牢が降つてきて、エルザを襲う。

エルザは斬らずに避ける。斬りかかってくれたら捕まえれて勝ちだつたのに……。今のエルザに斬られるほど柔らかくないしな。

あ……。

「蒼影、これを解かんか！」

何があつたかと言つと、近くで心配をしていたマスターの上に牢が降つていて、マスターを閉じ込めていた。

…………面白いし、試合終わるまでこのままでいいや。

「天輪の鎧だ。もちろん周りの剣も使うからな。」

んー、一応魔力があるから剣も喰えるんだよな。その代わり剣は壊れるから、味方になるエルザに使えないんだよな。

「となると、落とすか。」

使われる前に重力で地面に埋め込んだら、操る事も出来ないだろうからな。

「なにつー。」

「これで周りの剣は使えなくなつたな。」

「なら……。飛翔の鎧。」

飛翔の鎧によりスピードの上がつたエルザが攻撃をしてくる。

「重力操作。」

「何つー。」

俺の周りに重力で壁を作り、攻撃を防ぐ。そして、エルザに雷槍を突き付ける。

それにして、スピードを上げる魔法作つうかな。

「勝者、蒼影。」

後は、ラクサスとの戦いか。ラクサスはエルザやミリソより強いし、面倒だよな。

「つと。」

エルザがいなくなり、ラクサスを待つていると、急に雷が飛んでき

た。

「ラクサス！何をするんじゃつー！」

「うるせえな、早く戦わせろよ。」

「マスター、退いといてくれ。」

「蒼影もじゅつー早くこれ解かんかー！」

あ……。まだ牢有るままだつた。

「悪い、今解いたから。んじゃ、始めるか。」

「やつとかつーレイジングボルトッー！」

「霸天竜の雷陣ー！」

ラクサスの放った雷を自分の雷で消し、そのままラクサスに攻撃する。

「つぐ、俺の雷が破れただと。」

ラクサスは自分より年下に破れたのがショックだったみたいだな。別に破らなくても、喰らえばよかつたんだけどな。

「レイジングボルトッー！」

「霸天竜の黒煙。」

ラクサスに向けて、黒い煙をだす。この煙の中では魔法が一切使えないんだよな。この煙が魔力を吸収するからな。もちろん俺には関係無いけど。

今結構ムカついてるし、早めに決めるか。理由?なんか今のラクサスって偉そうでムカつぐじやん。原作の後の方は好きだつたけどさ。

「霸天竜の咆哮!」

ラクサスに向かってブレスを放つ。言つたかもしけないけど、霸天竜の咆哮は全属性が込められてるから、防ぎようがないと思つ。一つの属性だと、弱点の属性が打ち消すしな。

結構範囲も大きくしたから、避けるのも間に合わないと思つな。

「レイジングボルト!」

ラクサスが攻撃したみたいだけど、威力は全く落ちずラクサスに当たつた。

死なないようにはしてるから大丈夫だけどな。

「蒼影よ、ラクサスは大丈夫なのか……。」

「ちゃんと加減はしているから。」

「なら、よいが……。」

「これで全部終わりって事でいいのか?」

## バトル（後書き）

なんかミリとのバトルが……。そういえば、フェアリー・テイルにレビィが入るの本当はもっと後なんですよね。まあ、気にしないけど。

歓迎パーティー（前書き）

三作更新。

## 歓迎パーティー

「リュウウツチ大丈夫なのさ？」

「ナツミ、蒼影が怪我するわけないじゃない。」

「そうつすよ。今はまだ子どもなんつすから。」

なんか言い返したいけど、全部事実だしな……。俺が滅竜魔法のみで普通に戦つて、傷が付くのはまゆき先輩達とこのギルドだと、マスター やギルダー そくらじじゃないか。まあ、もつ少しした リハビリ達でも傷付くだろうけど。

「蒼影、ギルドに行くわよ。他の人達もギルドに戻るみたいだから。」

「ああ。そうだ。ナツミ、マスター やラクサス達の写真撮つておいたらどうだ？」

「もう撮つてるのでさ。」

相変わらずナツミは行動が早いな。ちなみに、撮つた理由は戦いようだな。ナツミの魔法は生き物にも有効だし、マスターはもちろんラクサス達も結構強い方だしな。

「しかし、ギルドに入るのにあんなに戦わないといけないなんてな。」

「あたし達は戦つてないけどね。それに蒼影もそんなに疲れてない」

んでしょう？」

「いや、仲間になる人と戦うのは結構嫌だ。それに精神的に疲れだぞ。」

「それなら大丈夫よ。そんな事より早く行くわよ。」

「そんな事つて……。」

まあ、いいか。それより、まずはギルドに馴染まないとな。後、S級にもならないといけないな。

百年クエストとかああいつのにも出てみたいし、原作でギルダーツが行つたやつ以外になんか無いのか？無いのなら十年クエストとかに行つてみるか。

パンパンツ

『フュアリーテイルによつて…』

ギルドに入ると、いつの間にか用意をしたのかパーティっぽくなつていた。いや、本当にいつの間に用意したんだよ。

聞いてみたら、マスターが帰ってきた時にもう準備をしてたらしい。本当は時間ないから、出来なかつたみたいだけビナツが喧嘩売つてきたから時間が出来たらしい。

わざわざありがたいな。

「よつ、楽しんでるか、蒼影。」

「グレイ、俺のセリフ取るんじゃねえよ！」

「飯を食つてたら、何故かグレイとナツがやつてきた。喧嘩するなら二人で来なかつたらいいのにな。」

「「ガツ。」」

「喧嘩すんなつて。で、どうしたんだ、火の滅竜魔導士に変態。」

「一人にかかる重力を変え、喧嘩を止める。」

「「く、くるしい。」」

「あ、悪い。」

「あのままじゃ、ほとんど喋れないしな。一人にかかる重力を元に戻す。」

「「いきなりなにすんだ！」」

「息ぴつたりだな。」

「話しかけて来たのに、いきなり喧嘩を始めるからだらうがよ。」

「「悪い……。」」

「で、どうしたんだ。火の滅竜魔導士に変態。」

「俺はナツだ。ナツ・ドラグニエルだ。」

「変態じやねえよー。」

「いや、パンツだけの人間は変態だろ。」

「二つの間に一つ。」

まあ、変態ってのはわざと言つたんだけどな。てか、女の前で裸つてのはやめひよな……。今はメルティ達がいなからいいけじか。

「俺はグレイだ。」

服を着てきたグレイが俺に自己紹介をする。

「それよりーなあ、お前滅竜魔法使えるんだなー。」

「まあな。ナツもなんだろ?」

「ああー俺はイグニールから教えてもらつたんだ。」

「イグニール?」

「ああ、こいつはアーラゴンに育てられたらしいぞ。」

やつぱりアーラゴンに育てられたんだな。原作で知つていても少し驚くな。

「でもさ、アーラゴンなのに滅竜魔法を?」

まだ原作はそこまでいってないし、本当不思議なんだよな。後、不

思議に思わないナツ達も。

「まつー。」

やつぱり、今気付いたんだな。何気にグレイも驚いてるのに驚いたよ。グレイも気付いてなかつたんだな。

「まあ、こいナゾ。ああ、後、俺はドーラゴンに育てられてなーぞ。生まれつきだ。」

「転生した時に貰つたんだし、間違つてはなーいよな。」

「ナツなのか……。」

何も手掛かりが無いと知つて落ち込むナツ。

「もう落ち込むなつて。俺も搜すの手伝つから。」

「ありがとな。」

「で、グレイはまづしたんだ?」

「俺は楽しんでるかと思つたんだよ。」

「まあまあ楽しんでるよ。入る前にいろいろ有つたしな。」

ナツとの戦いだけじゃなく、ミラ、エルザ、ラクサスだからな。

「でも、凄いよな。ミラ達に勝つまつなんて。俺達なんて全然勝てないのさ。」

「そりゃ落ち込むなよ。勝てないなら、努力すればいいだろ。」

原作では結構強くなつてたし、ヒルザにも勝てるよつてなるだろ。

「俺は少し回つてくるな。じゃ、グレイ、ナツ。」

「メルディやまゆき先輩達何処だろつな。後、ギルドマークも入れて貰わないと。まだ入れてないしな。」

「マスター、ギルドマークつてまだ入れなくていいのか?」

カウンターで酒を飲んでいるマスターを見つけたから、聞いてみる。

「おおつ、忘れておつた。他の者も呼んでくれ。」

「忘れるなよな。」

まあいいや。えーと、何処にいるか分からぬし、時計使つか。

『聞こえるか?..』

『どうしたんつすか?』

鈴花はナツミと一緒にいたいだな。鈴花と一緒にナツミの声も聞こえ  
てきたし。

『どうかしたの?..』

まゆき先輩はメルディとか。

『マスターがギルドマーク入れ忘れてたから、今から入れるってよ。』

『なら、ナツミと行けばいいんっすね。』

『ああ。よひしへ。』

『じゃ、あたし達も行くね。』

『もう少しで来るって。』

『今のはなんなんじや？通信用のラクリマでは無いみたいじやが。』

『いやあ、通信用のラクリマって結構大きかったつけ？ま、適当に誤魔化しておくか。』

『俺の魔法で作ったんだよ。』

『また作ってギルドのメンバーにも渡そつかな？夕紀のおかげで通信機能は時計作つたら勝手に付くし。』

『蒼影が使える魔法は、滅竜魔法だけではないのか？』

『ああ、霸天竜の滅竜魔法に重力操作がメインで少し他のが使えるくらじだな。』

『なるほど。ミラが動けなくなつてたのはそういう事じやつたのか。しかし、どうして途中から動けたのじや？』

「ああ、普通は動けないはずが動けてたから、真面目に戦いたかったんだよ。」

ただ、今考えたら面倒だし重力で動けなくしたまま戦えば良かつたと思うな。

「//リ達と戦つて遊びの悪つた？」

「ん？ 結構強かつたし、これからもちゃんと努力すればもつと強くなると思うけど。」

まあ、//リ達からしたら何様だつて思われるかもしれないけどな。

「ふむ……。良かったの//リ、エルザ。」

「あ、当たり前よつ。」

「もううんです。」

マスターはまゆき先輩達と一緒に来ていた//ラとエルザに声をかけた。一緒にいるつて事は、結構仲良くなつたのか？ てか、//ラとエルザは顔赤くしてゐるし。なんか照れるよつな事あつたか？

「マスター、マーク入れてくれ。俺は右手でいいや。」

「わかつた。」

「ナツ//リ達も同じ場所にお願いするぞ。」

俺達は全員右手にマークを入れてもらつて、俺は黒、まゆき先輩達は

白だった。

「何でわざわざ一緒に場所にしたんだ？」

「そんなの一緒がいいからに決まってるつす。」

「黙日だつた？」

「いや、別に個人の自由だしな。」

「なら、気にしなくて良いから。」

それもそうだよな。さて、鈴花、ナシミはもう消えてるな。鈴花は多分だけど、罠でも仕掛けに行つたんだわ。ナシミは魔法用の写真か？今は結構メンバー集まつてるしな。

「メルティ、まゆき先輩行くか。」

「何処に行くの？」

「蒼影の事だし、適当に回るんやしそ？

「まあな。さすがに外に行くつもりにはならないし。嫌なら別に個人でいいけど。」

「私は蒼影と一緒にない。」

「あたしも何もする事ないからね。」

「んじゃ、適当に回して事で。」

明日にでもマスターに頼んで、家を買つとするか。

やつぱり休める家は必須だしな。

「ねえ、蒼影。家買つつもりなんでしょう？」

「そうだけど？」

「お金大丈夫？」

「ああ、メルディは心配しなくて大丈夫だ。（ナデナデ）」

心配してくるメルディを撫でる。まあ、あんな森で暮らしてたんだ  
し、金は心配だろくな。

「どれくらいの買つもつくなわけ？」

「そうだな。ま、二十人くらい暮らせる程度かな？こっちに来るメ  
ンバーもいるだろ？音姉やフィルとかさくらとか特に。」

「確かにあるわね。でも、あるの？」

「多分な。」

まあ、なんとかなるだろくな。

## 歓迎パーティー（後書き）

これからのお祝いは、オリジナルのクエスト、ハッピー誕生かな？

それが終わったら、二人仲間になつてもらいます。

## 初クエストへ

「よく見つかったっすね。」

「ギルドに入つて一週間くらいして、やつと二十人くらい暮らせる程度の家が見つかった。」

「まあ、運が良かつたつて事だな。」

「そうっすね。それより、蒼影はギルドに行かないんすか?」この所ずっと借りてた所に籠もつてたつすよね。」

「ああ、時計をな。鈴花達には渡しただり?」

「ああ、マスター達に渡すのね。」

「ああ。前の世界より危険があるわけだしな。」

「もう完成したの?」

「ああ。まあ、今すぐ渡すつて訳じやないけどな。ギルドにはそろ行くよ。」

「なら、あたしと鈴花は依頼に言つてへるね。」

「ああ、頑張れよ、まゆき先輩、鈴花。」

「蒼影もね。」

「ナツミ達をよろしくつす。」

「わかつてゐるつて。」

今日からまゆき先輩と鈴花は依頼に行くんだよな。まあ、そこまで危険なクエストではないけど、時間がかかるんだよな。

確か一、一週間だったかな？ナツミも一度クエストに行つたんだよな。メルディは行こうと思えば行けたんだけど、俺と一緒にいるつて言つて行かなかつたんだよな。

俺もそろそろクエスト行こうかな。

「蒼影！俺と戦えー！」

ギルドに入ると、ナツが叫びながら俺に殴りかかってきた。……  
ギルドに入ったとたん戦えつて。

「今度な。今眠いし。」

「グヘツ！」

重力操作で重力の向きと大きさを変え、ナツを壁に叩きつける。

「だつせーな、ナツ。」

ナツの後ろから来たグレイが笑い、それに反応したナツがグレイにキレる。

「うせんだよ、グレイ。お前は黙つてひー。」

「ああ？ やんのか。」

「やつてやるよー。」

始まつたよ。何で二人共毎回喧嘩するかな？

まあいいや。二人共無視しとくか。

「二人共馬鹿みたい。」

「メルディの言つや。リュウウチ無視して行くのや。」

「やつだな。」

俺が止めなくとも誰か止めるだろ？ しな。

「おはよー、蒼影。」

「リサーナか。今日はエルフマン達と一緒にしないのか？」

「別にいつも一緒にいるわけじゃないよ。」

まあ、それもそうだよな。

「それより、マスター。なんか仕事ない？」

「お主は来た途端にそれか。」

「だつてまゆき先輩達働いてるんだし、何もしないのは少し。」

「まあ、よいわ。あるにはあるが、一人では行くなよ。」

「何で？」

別に一人でも問題はないような気がするんだけど。

「一応じや。一、三人で行くよつにな。」

ナツミは家の管理とかで残つてもらうか。なら、俺とメルディ、後一人誘つてみるか。仲良くなるために丁度いいし。

「ナツミは留守番頼むな。」

「分かつてるのさ。その代わり、早めに帰つてきて欲しいのさ。」

「分かつてるつて。」

あの広い家に一人は寂しいだろつしな。まあ、俺がクエスト行かなかつたらいいだけなんだけどな。

「さてと、後一人誰にするかな。」

「蒼影、私が一緒に行つてやるよ。」

「何を言つているミラ、私が一緒に行くに決まつている。」

いつの間にか話を聞いていたミラとエルザが、どちらが一緒に行くかで揉め始めた。

「これどつち選んでも駄目だよな。」

「エルザは仕事があつたじやない。」

「やつでした……。」

エルザは行かれないみたいだな。なら、//リに頼むか。

「残念だつたな、エルザ。ま、頑張れよ。私が「お姉ちゃん、お姉ちゃん明日約束は?」やつだつた。明日はリサーナ達と約束があつたんだ。」

いや、妹達との約束忘れんなよ。ともかく、//リとエルザは無理だから誰がいいか……。

ナツヒグレイは却下だな。ナツは勝負勝負五円蟻いだりつし、グレイは脱ぎ癖がな。なら、レビイとカナのびっちかか。まやはレビイに頼んでみるか。

「そいえば、何のクエストなんだ?」

「洞窟内の魔物の討伐じや。」

洞窟か。なんか遺跡とかあつたら楽しいんだけじな。てか、洞窟なら尚更レビイがいいな。もし古代文字あつても、俺じや読めないし。まあ、あるとは思わないけど。

「メルティ、誘つのはレビイでいいか?」

「うん。」

「 なり、誘つてくるか。」

「 レビィは……、いたいた。普通に本読んでるな。

「 レビィなんの本読んでるんだ?」

「 あ、蒼影。前買った冒険物の小説だよ。」

「 面白いだな。よかつたら読み終わって貸してくれないか?」

「 いいよ。でも、蒼影って本好きなの?」

「 結構好きだぞ。なんかオススメあつたら教えよつか?」

「 本当? 私も何かあつたら教えるね。」

「 レビィでこんな時から本好きだつたんだな。」

「 ありがと。」

「 そういうば、蒼影私に用があつたんじやないの?」

「 そうだった。レビィが良かつたら俺とメルディとレビィでクエスト行かないか?」

「 私が一緒に?」

「 ああ、洞窟での討伐だったな。」

「 討伐……。私はエルザやミラ達みたいに戦えないから……。」

レビィの魔法つて、立体文字《ソリッドスクリプト》つて書いて、文字を立体化させて意味を持たせる魔法だつたよな。それ結構強いと思つんだけど、今は使えないのか？

「レビィは何の魔法使うんだ？」

「私は立体文字だよ。」

もう使えるみたいだな。なら、大丈夫か？もし使いこなせてないなら、少しあは手助け出来るだろ？

それに、レビィはJ級の試験にも選ばれてたし、大丈夫だろ。

「大丈夫だつて。別にエルザ達みたいに戦わないといけないんじやないんだし。それに、何かあつても俺が守るしさ。」

「…………うん。頑張つてみる。」

「ありがと、なら用意して行こうぜ。向こうで待つてるから。」

「うん、すぐ行くね。」

これで大丈夫だな。俺は特に準備ないしゅっくりしつくか。

「蒼影、出来たよ。」

「分かつた。なら、先に外出といてくれ。メルティがいるから。」

「わかつた。」

確かに、機械召喚つてのでいろいろ作ったな。機械召喚は初めは面倒だけど、一度作ったら情報が記録されて、簡単に呼び出せるようになんだよな。性能とかいろいろ弄つて何個か作ったし、移動に使うか。

まあ、ギルド出ですぐこな無理だけど。

「こじ、マスター行つてくゐんで。」

「氣を付けるんじやぞ。」

わてと、メルティとレビヤが待つてゐて、早く行かないとな。

「お待たせ、んじや行こつ。」

「うん。」

「分かつた。」

クエストの場所はつと。普通に行つたら約一週間くらいだな。移動の時間は機械召喚で作った分なら、かなり短縮出来るし大体三日か四日で終わるだろうな。

「それにして、洞窟内の魔物討伐か。洞窟を壊さないよつて氣を付けて戦わないとな。」

「そんな心配するのは蒼影だけだよ。」

「こじこじ、ミリヤエルザ、ナツだつているじゃないか。なあ、メ

ルディ。」

「うん……。でも、今は蒼影だけだよ。」

「それもそうだな。」

まあ、威力を抑えて戦えば問題ないだろ。後、範囲を絞つて貫通力を上げるとかか。

「ねえ、クエストの場所まで時間かかるみたいだけど、どうやって行くの？」

「乗り物があるから、それで行くよ。これな。」

出した車をレビィに見せる。

「中に入つていい？」

「ああ、レビィも来いよ。」

「あ、うん。」

今出した車は、UXQ293。移動用に作った車で、外見より中が広く部屋が四つ着いている。ちなみに、名前は適当に思い付いたアルファベットと数字で決めた。

「蒼影、これなに？」

先に入ったメルディが聞いてきた。

「部屋だよ。四つあるから一人一つ使って良いぞ。まあ、明日には着くけど。」

「ウソ！？普通一日くらいかかるのに。」

「結構速いからな。」

ちなみに、運転は必要ない。自動操縦《オートパイロット》っての作つてて、機械の操縦とかが自動になつて、最適の行動を行つてくれるからな。てか、これ技能なのか？まあ、別にいいけど。

「蒼影、私ここがいい。」

「なら、私はここにしようかな。」

「了解。鍵はこれな。俺は向こうだから。」

部屋は、入り口の右に一部屋、左に一部屋で、廊下を挟んでもう一部屋ずつある。操縦席は一番前だ。

メルディは入り口の右、レビィは左を選んだ。俺はメルディの向かい側だ。

「鍵まであるんだ。」

「後で行つてもいい？」

「別にいいぞ。」

メルディとレビィと別れて部屋に入ると、自動操縦を使う。

暇だし、なんかするか。

## 移動中の会話

「蒼影、入つていい?」

「ああ、いいぞ。」

「そうだ、メルディもいるし技能作成『スキルメイク』でなんか作るか。メルディは知ってるから、アドバイスもらえばいいし。」

「何悩んでるの?」

「ああ、新しい技能作ろうと思つてな。何かいいのないか?」

「幻覚とかは?」

「幻覚か。そいえば無かつたな。幻覚つてどの系統なんだ?」

「幻覚は幻覚だと思つ。」

「だよな、なら系統は幻覚、効果が相手の魔力を利用して幻覚をかける。にするか。その代わり、魔力が無くなつたら解けるつて事にするか。」

「名前はどうするの?」

「名前かー。毎回考え付かないんだよな。」

ネーミングセンスが無いだけなのかもしれないけど。

「なら、魔吸幻覚。」

「そうだな。それにするか。」

メルディが考えててくれた名前だし、俺は思い付かないし。

なら、名前が魔吸幻覚、効果が相手の魔力によつて幻覚をかけるつて事で作るか。

「よつし、完成つと。ありがとうな、メルディ。」

「ううん。でも、なんで小さく分けるの？全部に効果のあるのを作ればいいのに。」

「まあ、そなんだけだ。ただ、効果強過ぎたら相手が少ない時困るかなって思つてな。」

わざわざ一人相手に大規模な魔法を使うのも大袈裟だし、いくつも使い分けて戦つた方がいいしな。まあ、実際は俺がそうしたいだけなんだけど。

「そなんだ。」

「まあ、そのせいでとつその時困るかもしけないけど。」

「その時は私が蒼影を守る。」

「ありがとうな。」

メルディを撫でながらお礼を言つ。

「すぐつたい。／／／」

「ああ、悪いな。」

「蒼影、入つても良いかな?」

メルティと話していると、レビイの声が聞こえてきた。やつぱり一人は暇なんだろうな。本とか持ってきてなかつたみたいだし、やる事ないんだろう。

「ああ、いいぞ。」

「おじやましまーす。」

「どうしたんだ?」

「えつと、少し暇になつて。後、聞きたい事があるの?」

暇つてのは予想道理だけど、聞きたい事?メルティいて大丈夫なのか?

「蒼影、私はもう戻るから。」

「ああ、さつきはありがとうな。」

「えつと……。」

「レビイ聞きたい事つてなんだ?」

「えっとね、何で私なんかなって思つて。」

「は？ 一体なんの事なんだ。」

「だから、なんでこのクエストに私を誘つたのかなって。

私はミラやエルザみたいに強くないし、他の人に比べたら勝てる事なんかないし……。」

そんな事か。もう少し深刻な話なのかと思つたよ。

「別に理由なんかないぞ？」

「えつ？」

「ただ単に仲良くなりたい、一緒にいたら楽しそうだから、誘つたんだし。

それに強くなつて言つけど、まだ子どもなんだし強くなくてもいいだろ。」

てか、普通子どものはそんなに強くなれないだろ。エルザやミラは例外だけど。

人には得意、不得意があるしな。

「レビィはレビィの得意な事を頑張つてたらいんだよ。まあ、苦手な事だから努力しないつてのも駄目だけどな。

レビィは古代文字が読めるんだろ？俺達が出来ない事が出来るんだから、ちゃんと勝つてる所だつてあるしな。」

「でも、そんなのあまり役に立たないし。」

「てか、力つていつも戦うための物だけじゃないんだしな。それに、レビィはミリやエルザじゃないんだから、違つて当然なんだよ。世の中にはいろんな人間がいるし、いろんな依頼がある。」

その中には、エルザ達には出来なくて、レビィには出来るってのだから、今は悩まなくていいんじゃないかな?」

「でも、もしかしたら俺が誘つたのが原因なのか?」

「でも、知識だけの私なんて必要とされないんじゃ。」

なんかマイナス思考だな。いや、俺が励ませてないだけか?」

「んー、レビィはさ使いこなせるじやんか。古代文字を知ってるんじやなく、読めて意味も分かるんだろ?」

「少しだけ……。」

「この年で少しでも理解出来るなら十分だつての。」

それに、俺もミリ達だつて最初から強かつたんじゃないんだよ。頑張つて努力して、壁にぶつかつて挫折を経験して、壁を乗り越えていくのを繰り返してるんだしな。」

「うん……。」

「まあ、気の利いた事が言えなくて悪いな。」

「うん。」

「ま、一人で駄目なら俺も手伝つから、一緒に頑張ろうな。」

「うん。」

「じゃ、話は終わりって事で。何か飲むか?」

「うん、もう戻るよ。」

「そつか。んじゃな。」

はー、全く。気の利いた事くらい言えたらしいのにな。まあ、いいや。そろそろ着くみたいだし、準備するか。

まずは依頼主のいる町に行くか。依頼主は村長みたいだけど、村に被害でも出たのか?

「さて、ここまでだな。こつからは歩いて行くから。」

「わかった。」

「うん。」

レビィはなんか元気になつていた。まあ、ネガティブよりはいいが。

「止まれ!」

門番か？

「フェアリー・テイルの人間だ！依頼を受けこの村に来た！」

「何？お前達がフェアリー・テイルだと？まあ、いい。少し待つてろ。

」

なんか感じ悪いな。やつぱりガキだからって舐めてるのか？ま、俺がこの村の立場だったら、あんな態度取りそつだしそうがないか。

「あなた達がフェアリー・テイルの方ですか？」

出てきたのは、三十代くらいの男性だった。もしかしてこの人が村長か？

「ああ、マークも入っている。」

その男性に、ギルドマークを見せる。

「確かに。私はこの村の村長です。詳しい話をしたいので、中へどうぞ。」

この人、本当に村長だったんだ。俺の中では、村長は年寄りってイメージなんだけど。てか、あんまり偉そうじやなかつたな。

「蒼影、行こう。」

いつの間にか先に行っていたメルティが俺に声をかけてくる。レビイも行つてるし。

少し進むと、他の家より少し大きいくらいの家があった。中は結構綺麗だった。ただ、本棚が多いな。

「んじゃ、依頼の確認なんですけど、洞窟の魔物討伐でいんですよ？」

「はい、ただ……。」

「何か問題が？」

「はい、実は最近洞窟に入れなくなつたんです。」

入れなくなつた？もしかして、結界かなんかが出来たのか？

「わかりました。それもう一回りでなんとかします。」

「お願ひします。」

「はい。メールディ、レビィ行くぞ。」

結界みたいな物か。レビィがいるし、なんとかなるだろ？な。

「さてと、明日から始めるけど、多分レビィの力を借りるからな。」

「ええっ！わ、私が？」

「ああ、あの村長が言つてたのは、術式とかみたいな物だろし、そういうのはレビィが適任だからな。」

まあ、その質によるかもしぬいけどな。あまりにも上手く作つて

るなり、今のレビュには出来ないかもしないからな。

「ねえ、私は？」

「メリディには洞窟内の構造を調べてもらつたりと、いろいろあるから。」

メリディなら風を操れるし、それで道とか調べれるからな。

「わかった。」

「他にもあるかもしねいけど、今は決めなくて良いだろ。俺は少し村回るから、先に休んでてくれ。」

さつき村長から泊まる場所は貸してもらつたからな。

「蒼影はどうするの？」

「適当にな。ま、すぐ行くから。」

まずは、どれくらいいるか把握したいんだけど、無理だと思つから村の人人がどれくらい見たか聞いてみるか。

結構見た人いるみたいだし、すぐに情報が集まるだろ。

「お帰り、蒼影。」

「ああ、ただいま。」

村で聞いた情報だと、魔物は十くらいみたいだな。後、魔物は中型みたいだ。

「どうだった?」

「何もなかつたよ。情報は入つたナビ。ま、後で詰つよ。」

明日はわかつやと付けてくるか。

## 初クエスト開始

「どうだ、レビイ？」

「これなら、何とかなるかもしれない。少し待つて。」

依頼に有つた洞窟に行くと、やつぱり術式みたいな物があつた。で、レビイが見てたんだけど、解けるみたいだ。

やつぱりレビイ凄いよな。一緒にいたメルティも少し感心してゐみたいだ。

「しかし、なんでこんな術式があるんだ？」

「分からぬ。」

「だよな。まあいいや。今はレビイが術式解くのを待つてゐるか。」

生命探索『ライフサーク』を使ってみたけど、この洞窟には五体しかいないみたいだな。その五体は結構大きいし、少し前まですぐそばに死にかけの魔物がいたから、共食いでもしたのか？

倒す相手が少なくなつたのはありがたいな。ただなあ……。見た目が大きい蛇なんだけど、それはいんだよ。ただ、目が背中に三つあるんだよ、気持ち悪いな。

「出来たつ！蒼影、メルティ、解けたよ！」

レビイの方を見ると、さつきまであつた術式が消えていた。解除に

かかって三十分くらいだよな、

「ありがとうな、レビイ。(ナガトナガテ)」

「うふ……。//」

レビイの頭を撫でて、メルディに声をかける。

「メルディ洞窟内を頼むな。」

「うん。」

メルディは風力加工《エアアート》を使い、洞窟内を調査する。風で洞窟とかの形とかを確認したりするのは、メルディが自分で考えたんだよな。俺は風の向き、強さ、温度などを自由に変える事が出来る程度にしか使ってなかつたしな。

ただメルディが言つには、洞窟みたいな空間だけみたいらしげいけど。

「わかつた。」

メルディから洞窟の内部を教えてもらつた。洞窟の中は、途中まで真つ直ぐの道だけで、途中から三つに別れてるらしい。

「入るか。メルディとレビイはどうする?」

「行く。」

「私も一緒に行くよ。」

一応守護動物《ガーディアン》でも使ってレビイとメルディを守つてもらつとくか。

「守護動物、サン。」

レビイに見えないよう使い、猫の守護動物、サンを呼び出す。

「レビイ、持つてくれないか?」

「えつ? 猫?」

「や、名前はサンね。」

「ひー。」

サンがレビイに向かつて鳴く。守護動物は言葉を理解できるし、挨拶のつもりなんだろ?。

「じゃ、行くか。」

「シコウウ。」

洞窟を進んでいくと、蛇のよつな男が聞こえた。

確実に魔物だよな。

「レビイ、メルディ少し待つてくれ。」

メルディも戦えるけど、今の所俺だけ何もしてないし、俺が戦うべきだよな。

「まずは。」

重力を操り、前にいた魔物をこっちに引っ張る。

「霸天竜の碎牙！」

こっちに飛んでくる魔物に向かって、咆哮より範囲を絞った技で攻撃する。魔力の込めた爪を振り魔物を切り裂く。

「シャアツツツ。」

飛んできた魔物は三体で、その内一体は今ので殺せたが、その一体が邪魔で後ろにいたやつを殺せなかつた。

魔物は、飛んできた勢いのまま口を開き、俺を咬み殺そうとしてきた。

「つと、霸天竜の炎刀！」

「シャアアアツ！」

攻撃を避けた後、無防備になつていた背中の目の一つを突き刺す。

少し怯んだが、残つた目から液体が飛んでくる。

確か、コイツの目から出る液体は、魔力の吸収、麻痺があつたな。

「重力操作、霸天竜の岩針。」

重力操作で液体を落とし、滅竜魔法で周りの岩を尖らせ、魔物串刺しにする。

「やつぱり結構でかいよな。」

「蒼影、大丈夫！？」

「ああ、別に怪我はしていないから。」

少し岩にあたつて服が破れたくらいだしな。

後は一體か。

「んじや、進もうか。」

「蒼影、いる。」

「いぬ？……ああ、なるほど。」

注意して見ると、奥の方に魔物がいた。一體いて、一體はさつきのやつと同じ位だったけど、もう一體は一・五倍くらい大きかった。

「蒼影、私が倒す。」

「わかった。なら、でかいのは俺が殺すから、メルディはもう一體を頼む。」

「うん……。風力加工、風剣。」

メルディは、風を操り剣を生み出す。そして、その剣を操っていく。

「重力壁作成。」

重力を操り、俺、でかい魔物とメルディ、レビィ、もう一体の魔物の間に壁を作る。

これで邪魔が入る事は無くなつたな。

「かなりでかいよな。」

まあ、別にいいけど。まずは目を潰すか。あの液体被つたら面倒だしな。

「キシヤアアアツ！」

蛇が尻尾を振り回し、俺に叩きつけてくる。

「つと、霸天竜の炎陣！」

自分の周りに炎を展開して、尻尾を焼く。

「うわつ……。」

焼けた尻尾の匂いが結構いい匂いなんだけど。

「シャアアアツ！」

蛇が痛みで暴れ、液体を飛ばしてくる。

「霸天竜の炎槍。」

液体は炎で蒸発させて防ぎ、炎の槍で蛇の尻尾を突き刺す。

「霸天竜の翼撃、バージョン炎。」

魔力の属性を炎に変え、蛇を切り裂く。

「だから、何でいい匂いがするんだよー。」

攻撃を蛇を少し避けたから、切り裂いたのは尻尾だけだったが、かなりいい匂いがする。

食つたら美味しいのか？でも、情報だつたら食えないみたいなんだよな。

「シャアアアツ！」

蛇が噛みついてくるが、蛇は俺でなく近くの岩を噛み碎く。

「つづ。」

噛み碎かれた破片が俺の足に突き刺さる。

てか、結構大きい岩なのに軽く碎くんだな。

「やつぱりつづだよな。」

やつぱり戦いは少しくらい傷付かないとな。Mつてわけじゃないけど、圧倒的な勝利よりいいよな。

まあ、基本傷付かないんだけどな。

「霸天竜の炎柱！」

地面に魔力を流し込んで、蛇の足元から炎の柱を生み出す。

「ギヤアアアアツ！」

炎に飲み込まれて悲鳴をあげる。そして、俺が作っていた重力壁に当たり沈む。重力で押し潰され、炎に焼かれた蛇が息絶える。その後も炎は消えずに燃え続ける。

……真っ黒だ。燃え続けた蛇は、真っ黒になり脆くなっていため、重力で原形がなくなっていた。

まあ、いいや。メルディ達と合流しないとな。

「これで終わり。」

メルディ達の所に行くと、丁度メルディが倒している所だった。

メルディも速いよな。それにしても、ぶつ切りって……。

メルディの相手をしていた蛇は、尻尾から頭まで二十等分くらいにされていた。

「お疲れ様、メルディ。レビィは大丈夫だつたか？」

「うん、私はメルディがいたし。」

「そっか、良くやったな、メルティ。（ナーナー）」

「ありがとつ……。／／／」

これで依頼は終わったな。ただ、あの術式がなんであつたのか、分からんなんだよな。

ああ……、そいえばこの世界に転生が決定した理由は、イレギュラーが原因だったし、これイレギュラー関係なのか？

「蒼影、行いつよ。」

「ああ、なら出るか。」

まあ、今考えたって分からないし、気にしなくて良いか。

「ここもー。」

「あ？..どうした、サン。」

レビィに預けていたサンが頭の上に乗ってきた。

「ここもー、ここにこもー。」

「まあ、いいけど。」

久しぶりに出て來たから、もう少しいたいらしご。まあ、可愛いし別にいいか。

「おつがとうございました。」

村に戻つて村長に報告すると、お礼を言われた。

「いりが報酬の物です。」

「ありがとうございます。」

ちなみに、報酬は金と本だ。本は村長の家にあるのを数冊貰つた。中には結構高い本もあつたんだけど、問題ないらしい。

「じゃあ、俺達はこれで。」

村長に挨拶をしてから、ギルドに帰る。

あ、ナシ!! お土産貰つて帰るか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2247ba/>

転生して異世界廻り～FAIRY TAIL編

2012年1月14日18時53分発行